No.1.

平新報

發行日　月三回五ノ日發行
發行兼編輯印刷人　山野邊庄吉
發行所　福島縣磐城郡平町田町一九
平新報社
廣告料　五號十二字詰一行一回五十錢　增減指定倍增
定價郵送料共五錢

發刊の挨拶

地方振興　農村啓發の見地より　宗教　教育青年處女在軍警察消防免囚保護てふ其他社會的施設諸機關の啓發竝に宣傳紙を以つて自任する

本紙の發刊に際し

自らが志を述へ地方大方諸彦の御贊助と御指導を切望す

主幹　山野邊庄吉

私等の前には普選を控ての準備として政治思想の涵養、思想の善導、自治開發、産業振興、引いて小作マツタ勞働問題其他幾多の問題が直面して居りますが、それは號々遂ふて實際問題に當つたその折々諸彦と共に考慮し批判し行く信條なるが故に私は此際主義とか綱領等と畏つた事は申上ません、只々今回歸鄉して農村の荒廢が都市の發達に反し而かも渡鮮以前より、より以上その荒廢の甚しいのに驚きました

× ×

農村は農村のみの問題でなく國家經濟的大問題で都人士共に、その解決に當り世に云ふ万物相關の理からしても農村問題の解決は都市問題の解決でありまして要は自奮自勵以つて自から濟はしむるのに歸しますが都人士の所謂學者爲政家は理想に奔りその實情に昏く農村の人又己れを知らずして都會生活を憧憬儚望して居るの憾みがあります

× ×

財界の行詰りや世の不景氣に連れ生活難の聲高く今や人心惡化の傾向があります人間の幸福は公平であるべき筈で其の日の米にも缺くものが一人でもあり……一方に贅澤の仕方題をして居るものがあつたとしたら憲政の濟美政治の要諦共存共營の實得て望むべからず

吾人は何人を問はず生活、即政治生活を離れて政治なく吾人人類をして靈肉物心共に餓えしめてはならず、要は國民生活の安定を期するが吾人生存の義務、政治の要道であると思ひます

× ×

磐城の天地は一小地域に偏在して居りますが地方新聞としては地方新聞としての個有の使命があり地方問題は地方人自ら提起し自ら解決せねばならぬかく申せばとて決して學者識者政治家の意見を聽く勿れと云ふのではなく物事は自他啓發ありて初めて進歩あり發展もあるのであるから都會と農村と中央と地方と宗教家教育者實業家爲政家とを曰はず、老若男女職業を問はず階級を論せず富めるものも貧しきものも共々持ちつつ持たれつ、共に俟ちて考慮し啓發善進せよと云ふのであります

× ×

時炎天酷暑の候に當り私の志の一端を述べ顧みて自ら微力忸怩たるものあれども世上諸君子の鞭韃と援助を辱うして地方の啓發の爲め操觚者としての責任と使命とを盡したいのであります、今回本紙の發刊に際し大方地方各位の榮福を祈ると共に蔓くは私の微衷の存する所を諒とせられ地方有志の理解のある贊助と指導啓發を切望して已まぬ次第であります

祝平新報發刊

縣參事會員
小野晋平
小名濱町

鹿島
三島五一郎
消防副頭
佐原久義
鹿島村

平町鹽屋本店
山崎清三

內鄉村會議員
加藤丈夫

平町釜屋
諸橋守次

磐城立憲新報社
小泉宗雄

酒 銘 井の玉
元造釀
長瀨半五郎
福島縣石城郡平村川

辯護士
山野邊義政
平町停車場通

磐城中學校卒業二八會
湯本町　比佐榮一
湯本町　鯨岡潔
湯本町　鯨岡久一郎
平町　關內正一
平町　諸橋元三郎
平町　吉田義男
平町　森合芳男
平町新妻一郎

平町磐城建物會社
井上貞次郎

平町
藤田如水

平町住吉屋支店
酒井清

小名濱町長
鈴木榮

高久村長
小野淺治

四ツ倉町
門馬安次郎

◉略儀乍

謹啓　殘暑の候益々御壯吉の段奉賀候陳者迂生今回朝鮮より歸省して本社の經營に當つて居ります、創業勿々の事で挨拶も遲れがち追々御面ご御榮を得たく略儀乍ら紙上を以つて各位の榮福と倍舊の御交誼を祈り合せて歸省の挨拶と時候伺ひを申し上げ度如斯に御座候

敬具

大正十四年八月

山野邊庄吉

知己各位

動中靜觀

筆者は數年間磐城の天地を離れて居つたので殆んど現在否な五六年前よりの事情が判らぬ、否な白紙である……が故に具体的の地方問題の批判の報導はその事情に精通する迄自發的に遠慮する、然しいづれその實情を知るを得ば第一線に立つて忌憚なき論陣を張り小さいながらも是は是とし非は非とし時代に アダプト「順應」する新聞たらしたる決心である此處許暫ら……く皆さんの御抱負、御手並を拜見聽し、引いては筆者に對する御小言、惡口、一部の人の中傷？ヂットとして受けます

直心深入

七十七字句

勸定が感情となり……肉親　鄉土　友に虐待されればされる程强くなりやい人情の沙漠を歩みながらオーシスはある、これが土即ち故山に蘇つた、の第一號である

◉社告◉

本號は單に本紙發刊の挨拶と宣傳に止めたので發刊の祝詞又は寄稿其他廣告を辱うた、……その一部が都合により次號に廻しました、いづれ新裝して紙面の擴張をなし諸彦の期待に背かない決心です

本社の事務所は當分のうち玉川村岩出二八及び平町田町一九橋本內です

本紙の持主は主幹自身であります

大正十四年八月

平新報社

凡倉拾年

源草生活山莊

はしがき　(一)

筆者は磐城中學校を卒へてから時の磐城青年統一會じ發行した『せいねんいわき』『啓發運動』の發行に力の衞後家庭の都合上自村石城郡玉川村に在つて自ら犁ど取り農夫生活を体驗する事前後三ケ年考ふる所あつて出郷し爾來朝鮮に五ケ年有半かの新附の地に内鮮、外人に介在して各方面に亘り朝鮮事情を研究すると共に若輩ながら内鮮人融和に寄つて居つたが健康勝れず今回歸郷し此處に學生時代から志して居つた新聞紙經營に對し自らの力の内實せるの自信を得て大膽ながら茲に敢然その衝に當り一身を此の業に委ぬる事となつたのである

其約拾年間の擧ごもを譫談的にものして見んとするのである、その凡倉拾年浮草のそれの如く漂流生活中体驗した政治、經濟、社會人生諸般の問題の研究と批評加ひて朝鮮事情の紹介、歸省後の見分と所感を一般に願たんとするの外他意はないのである

學窓から……

筆者は大正五年三月磐城中學校を卒へた所謂十六回卒業生二八會に幸じての仲間入りをして居るものである、丁度時の母校磐城中學校は平町子鍬倉神社の裏の揚土台上に北面して正門はくの字形正門坂櫻樹の下その櫻花の紋、白線二條の中學時代もなか〳〵ものすべき而白い事もあるがそれは後日に讓る事としたい……

……活社會へ

磐中を出ると早速父母兄姉等は筆者の身心の羸弱なるを見て生家の業たる農夫たらしめようとして居つたらしい、然し筆者は次男の生れで長兄が家督して居る以上農夫となつても詮ないものと思ひ上の學校に進むには体根、金根又病氣がち なる筆者は氣根も足らない 爭を知つて居つた、又農夫となつたとて生家の財産を按分なんてあまり氣持ちの良いものでなく況や婿樣なんては貰ひ手なかるべく夢更望まなかつたこんな具合で獨立自治の爲に就職問題に煩悶したものだ、然しその職業は好きなものに進みたい、……農夫になるには小兒時代から見て居るし相當やらせられたものだから手近な事だが如上の事情で將來に家庭不圓滿の因をなすものと考へて居つた、此件については追々述べて見たいが此處には省く事とする

それで中學時代から志して居つた新聞紙を平で經營せようかと決心したが二十歳未滿では法規が許さぬこの時平には今の樣に多くの新聞發行されず、今は故人となつたが土屋寛(知美)氏が豆新聞月一回でやつて居つた、勿論時事問題をかいて居つた、又當時筆者が磐中五年頃鹿島村の國井末吉氏が植竹源太郎氏を頭に載いて磐城の青年といふ雜誌を出した、同時に川崎文治氏が關内彦太郎氏の發行で土屋寛氏の後をうけて主幹として小學兒童機關の磐城の學友を出した、がこの雜誌は何號で終つたか記憶して居らぬ

中學を終へた大正五年に入つては土屋君の磐城時報一社のみであつた、然し一方他地社の支局としては福島民報に八代公行氏あり故金子信三(木南)君、報知伊藤儀一氏、福島新聞に湯山市八氏等で河北、諸賢其他の通信所はなく吉田新聞店時の西丸務平氏が磐城通信社を起し時事、朝日の通信を兼ねいづれも政友會の人民新聞記者つて毎日停車場に行くのかと、この人汽車と記者を一緒にしては樂に見えるものサー確かり働いて踊る事だ、盆踊りが近いてると共に早稻の穗が出揃つた 鄉等には鄉等としてのプライド「誇り」がある只々斷つて置くが農村振興は物的の單に農事改良では駄目だ心からの開發ある、それ自体の心の持ち樣である、鄉土を愛しつゝ生れた土地で成功する事岡崎前農相でなくとも若い娘達が好んで農家に嫁ぐ樣にならねば……ね

平新話誌

ウソの樣なり見て裏面を知らぬ話しだが米

農村の人々よ　あまり振の成る樹をり返らぬ事だ、土に頭を下知らず麥をげながら……農村には都會指して稻と申して居る人が人の知らぬパラダイス（樂都會には多い、所がある農境）がある筈だ、それは農知つて居る、何人も他の業夫した事ある筆者がヨック

祝發刊　玉川村

◀村會議員▶

高萩繁彌　小松精助　丹野七太郎　丹野寅吉　長野喜市　小濱熊治郎　丹藤三代治　齊木根忠三　駒崎市松　箱遠藤半次　（次第不順）

村長　永井億彌
助役　鈴木平九郎
收入役　鈴木稻美

新妻恒五郎

村農會會長　野崎喜代松

在郷軍人分會會長　野崎藤太

遍照院住職　永崎亮繁

消防小頭　村上重一　鈴木貞平

小泉一良　小泉民次郎

岩出年齢順　村上龜之助　永井鶴吉　山野邊長吉　山野邊金次郎　若松新之助　山野邊武

區長　山野邊壽松　鈴木益良

消防小頭　山野邊義輝

小松里吉

區長　大原渡邊守彌　野田永山太次郎　島小泉直猪

材木商　大原武田常松

精米業　住吉村上須美吉

文藝

川柳『タヒラ』吟社同人近詠

綿引東天紅

潮の花小鯛が釣れる磯の岩
遺稿集故人の反古へ花が咲き
釣仲間眼と眼で笑ふ動く浮木
朝顏の趣味は晨に床を蹴り
竹藥の說明をして只通り
鰻井を驕つて妙に嬉しい日

×　×

新島新坊

反古になる證書へ代書知惠を貸し
釣竿を重たく歸る釣れない日
面白く釣れて轉地の日が延びる
釣れて居る方へだん〳〵場所を替へ
反古にした社長へ迫るりが飛び
重くなる魚籠へ傾く陽を忘れ

×　×

渡邊一角

舌をなめづつて鰻の味をほめ
早起をさせる大きな當持ち

祝發刊

平藝妓屋組合
平町一丁目

清仙堂印舗
綿引秀親